
総長が愛した白衣に天使 Eカップの悲劇～

mahuyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

総長が愛した白衣に天使 Eカップの悲劇

【Nコード】

N9748Y

【作者名】

m a h u y u

【あらすじ】

リアリテイゼロ。

ハチャメチャラブコメディ。

関東地方牛耳る暴走族疾風の総長水野如月と
新米看護師神崎ヒヨコのラブコメディ。

ケータイ小説、魔法のIらんどに連載中です。

初めての夜間勤務

私。神崎陽良子。二十一歳。

今年、高看護学校を卒業してこの総合病院で勤務することになった。何といっても世間知らずの女子高育ち。

看護学校でもほとんどが女子だった。

当然、彼氏なんか出来たことない。
なのに……

花も恥らう乙女なのに

看護師の実習なんかで

男性患者様のポロリを見たりして

大騒ぎの実習生活だった。

彼氏いない歴20年なのに

ポロリを先に見ちゃうなんて

本当にトラウマになっちゃった。

でも、そんなの看護師仲間じゃ珍しい方で

私はいつもみんなに馬鹿にされてた。

馬鹿にされても、私はやっぱり男が大の苦手。

話なんかあんまりしたことない。

お父さんはいるけど女三人姉妹でいつも蚊帳の外だもん。

男の免疫なんか付きっこない。

あゝ

思い出しただけでも恥ずかし

そんなこんなでやっと看護師になれたけど

今日は初めての夜間勤務。

こんな私だから、みんなが面白おかしく脅すんだ。

たまに幽霊が出るとか、女の急患だと思ったら、実は女装した男だったとか

救急患者の命は夜間勤務のナースに掛っていると、まあこれは脅

しでは無く本当のことなんだけど。

今夜の夜間勤務は初子先輩と二人、夜の整形外科病棟、当然常備灯しか点いてなくて

どこに幽霊が潜んでいても不思議じゃないくらいひっそりしている。

「急患です。急患です」

慌ただしいコールが鳴った。

「ひゃあー！」

そのコールに背中がビク付いた。

一緒に夜間勤務をしていた初子先輩がキリツとした顔になって私の方を向く。

その顔……ちょっとこわいんですけど。

そして、今から喧嘩に向かうみたいになース服の上に羽織ったカーディガンを腕まくり。

鼻が膨らんで荒い鼻息を吹いた。

やっぱ怖いんですけど。

今年、ナースになったばかりの私にとってはかなりビクつくんですけど。

まさかまさかの救急患者。

うえーんどうすりゃいいんだ？

あたふたとあっちに行ったり、こっちにいたり、取りあえず、初子先輩の指示を待とう。

「神崎さん。至急病室の準備に取り掛かって。405号室が空き部屋になっているから」

「はい！」

薄暗い廊下をオドオドと走りぬけ、405号室に向かう。

勢いよくドアを開け真っ暗な病室を見ると誰も居ない筈のベッドの上人影が

「ヒィー！」

思わず奇声を上げて尻餅を着いた。

「ほや？」

そう言いながらその人影が起き上がる。

這いつくばって、必死の思いで部屋の電気を点ける。

「ほや？」

見慣れた患者の姿が有った。

「もう、正田のおじいちゃん。病室間違えちゃダメでしょ。正田さんは406号室だからね」

「へえ？」

少し惚けた顔で殺風景な病室を見渡し

「あゝ。間違えたあゝ」

そう笑ってベッドから降り病室から出て行った。

「はゝ。びっくりした」

ため息を付きながら、急患が入る準備に取り掛かった。

急患はベッドごと運ばれてくるので、部屋の中のベッドを病室の外に出す。

病院指定のパジャマと患者の身体を拭く為の熱々オシボリを用意。

準備万端。

ガラガラガラ

廊下から急患が運ばれてくる音が聞こえた。

すぐさま病室のドアを全開にする。

初子先輩が救急患者の寝ているベッドを運んできた。

「神崎さん、後はお願いするわ」

「はい」

救急処置室で応急処置を受けた患者は既に点滴で繋がれている。

その運ばれて来た患者を見て驚いた。

につ苦手な男性患者だった。

しかも髪の色は金髪。

額には血の付いた“爆走”と書かれた鉢巻き。

着ている服は白い半被のようで、なぜか菊の御門が貼り付けられて“特攻”と書かれていた。

どう見ても……普通じゃない感じ。
これはどう見ても、暴走族の一員だ。

高校生の暴走族？

こう言うやからはよく運ばれてくるが大抵は顔がボコボコに腫れ上がっていて、血まみれ

状態だと聞いているが、だけど、この急患。

綺麗な顔で、怪我の1つも負って無い。

お……おまけに驚くほど整った顔立ちをしている。

どきりとするような長い睫毛に、すっと通った鼻筋。

薄くて形の唇。

あんまり綺麗な顔なので、マジマジと仕事をするのも忘れて見入ってしまった。

特攻服を着た王子様？

んなわけ無いのは分かっているけど

でもでもでも、すごいカッコイイ。

眼を開いたらどんなんだろ？

もつとカッコイイのかな？

顔から視線をずらして身体に向ける。

その白い半被の下から素肌が見えていた。

素肌に半被だけを羽織っているようだ。

チラリと見えた素肌は筋肉質でその身体はまるで彫刻のよう。

厚い胸板の筋肉は相当な物。

くく。患者じゃなけりや指で押さえてみたい。

ハッ！

男嫌いの私が何を血迷ったことを。

ダメだ。

正気を失っちゃダメだ。

幾らカッコ良くても男なんだ。

頭をフルフル振って思考を正常に戻した。

救急処置室で処置を受けた後でお腹の周りには包帯が巻かれている。

「もしかして骨折？」

そうか。だからこの整形外科病棟に運ばれて来たんだ。
ふんふん。

その白い半被を良く見ると丁度お腹の辺りにタイヤの跡が残っていた。

「車がバイクに轢かれたんだ。脱がせた方がいいよね」
ぬ……脱がせる？

男免疫ゼロの私が男の服を脱がせなきゃいけないの？

右見て、左見て、どこ見ても私しかないし。

あゝん。

初子せんぱい。

でも、きつと呼べば怒られそうだ。

何をかわい子ぶっているんだと、仕方なくその汚れた服を脱がすことにした。

黒いタイヤの跡が付着した半被に手を伸ばすと
ガシッ

いきなり腕を掴まれた。

「俺に触るんじゃねえ」

地鳴りのような低い声が響いた。

こっこわい。

物凄い強い力で手首を掴まれている。

イッ痛い……

痛いけど声が出ない。

声が喉の奥に引っ込んじやった。

恐る恐るその急患の顔に眼を向けた。

瞳が開かれたその顔は思った通りカッコイイ。

切れ長で鋭い光りを放つ漆黒の瞳が私に向けられた。

「ごっごめんなさい。起こしちゃったね」

顔が変な方向に引き攣っている。

ヒクリヒクリとちゃんと笑えない。

「ここは？」

幾分柔らかくなったその声。

「あつここ？ここは病院。Ｔ総合病院」

「もしかして、俺……気失って運ばれた？」

鋭い眼光が消えて、緊張が取れたみたいだった。

「うん。だから、服を着替えなきゃね」

「なんで？」

「ほら、この服タイヤの跡が付いているし」

骨折をしている為、包帯の下にはコルセットが巻かれていて起き上がる事が出来ないのか、視線だけをこちらに向ける。

「クソゝあの野郎。本気で俺を轢きやがった」

顔を顰めて、悔しそうな顔をした。

「もしかして……喧嘩？」

一目瞭然だったけど、一応聞いて見た。

「まつそんなところ」

眼を閉じて大きなため息を付いている。

その表情はどこかあどけなさがあつて

「もしかして君、高校生？」

「うん。高二」

「高二？そんなに若いの？」

私の素っ頓狂な声にその整った顔を緩めてニコリと笑った。

「若いって……ナースさんも若いじゃん」

かっかわいい！

思わずそう叫びたくなった。

「やっぱ今夜は入院だよね」

「そうみたいよ。ごめんね。これ、一応脱がすからね。ちょっとベ

ツドの高さを調整するから、我慢して」

そうだ。子供と思えば平気だ。

そう。この子は男じゃないの。

まだ、子供なの。

そう言い聞かせながら、電動のリクライニングのスイッチを押す。
寝ていたベッドが音を立てて起き上がり、その患者の顔が眼の前に
近づいて来た。

子供と言っても、その整い過ぎた顔が恥ずかしくて眼を逸らした。

「あれ？看護婦さん、俺のこと意識してる？」

抜け抜けと含み笑いを浮かべて私の顔を覗き込んで来た。

「そんなはず無いでしょ。はい、この半被脱がすからね」

そう言いながら患者の身体から半被を剥がすように脱がした。

「俺、女に服脱がされんの初めて。なぐんかゾクゾクすんな」

「こ………高校生の癖に生意気言ってんじゃないの」

さつきチラリと見えた筋肉質の厚い胸板が露わになった。

ど………どう見ても子供じゃない身体つき。

どっから見ても立派な男じゃないか。

ファーストキスが……

「あれ？看護婦さん赤くなつてら」

「大人をからかうもんじゃ無いよ」

「って……あんた……まだ子供だつたりして」
くっ……

こいつ。痛いところについてきやがった。確かに私はまだその……この
年で……

経験どころか彼氏も出来たことないけど。こうあからさまにそれも
年下の高校生の子供に言われると腹が立つ。

「あれ？図星？じゃあ大人じゃなくて子供じゃん。あ〜でも俺、高
校生だけど大人だし」

くっ……

高校生の癖に経験あんのかよ。ってどう見ても暴走族の一員が経験
ないわけないか？

なんか……変な劣等感を味わった。

こんな……底辺の会話。

こんな高校生に乘せられて

ハッ！

そうそう仕事、仕事。

「はい、身体拭きますからね」

顔をヒクヒクさせながら持つて来ていた熱々のオシボリを1つ広げ
て彼の背中に当てる。

「は〜気持ちいい。病院ってこんなことしてくれるんだ。なーんか
気に入った」

「前は自分で拭ける？」

そう言ってもう1つの新しいオシボリを彼に渡した。

「俺……手もやられてるし。左手上げると胸が痛い」

そう言った彼の右手には包帯が巻かれていた。

右手も怪我をしているようだった。

かなりの怪我だったらしく、手当をした後でも包帯に血が滲んで来ている。

「そうだね。それじゃ拭くこと出来ないね」

仕方無く、彼のその身体を拭いてあげることになった。

こんな若い子の身体に触るの初めてだ。

はぁーやっぱドキドキするよー。

おじいちゃんとかおばあちゃんの患者ならよくあるけど。

でも……

綺麗な肌をしているなあ。

この胸……

とても綺麗な筋肉だし……

抱きしめられたらどんなだろ？

ハッ！

私、今なにを……。

バカバカバカ

私は変態か？

「なに首を振ってんの？」

彼の冷めた声が聞こえた。

「いつイヤ……なんか、スポーツとかしているのになって？」

変な質問をしてはぐらかした。

「スポーツ？うーん。ケンカならしよっちゅうしているけど」

もしかして、この筋肉、喧嘩でついた筋肉か？

どれだけ喧嘩をしているんだ？この男は。

「はぁー。やっぱ気持ちいい。俺、女に身体を拭いて貰ったのも初めて」

前屈みになって身体を拭いている途中、耳元でそう囁かれて、顔面に血が逆流し始めた。

こ……この声ヤバイ。

ヤバすぎる。

色気有り過ぎ。

血の逆流で動きが止ってしまった。
ダメだ。

このままだと脳が沸騰しそうだ。

「きゃっ」

腕を身体に回されいきなり引き寄せられた。

私はその彼の筋肉質の胸にスッポリおさまっていた。

「そんな真っ赤になると、俺、ゾクゾクしてきた。たまんねえ」

「ちよっ……」

彼の筋肉質の身体に閉じ込められている私にグッと顔を近づけて来た。

「やつぱ。俺のこと意識してるじゃん」

「そんなことない」

「赤い顔して、ナースさん。かわいいね」

「だから、大人をからかうな」

「でも、大人じゃないんでしょ？」

「れっきとした大人です。これでも二十一歳だ」

「へえ」

彼の唇が弧を描いた。

「ちゃんとした大人にして上げようか？」

「だから……大人だって言っているでしょ」

「分かった。じゃあ。大人ってことで大人の挨拶しようか？」

もつと顔を近づけて来た。

「ちよっ……ちよっ……ストッ……」

彼の形のいい唇が私の唇に触れた。

これ……

キス……

私……キスされてんじゃん。

嘘？

嘘？ストップ！

嘘ッブ？

でも……

柔らかいし温かい。

クッ……何？

この感覚。

気持ちいい……って思う私はやっぱり変態？って私のファーストキスが。

「もしかして……あんた。キスも初めて？」

急に身体から私を引き離して顔を覗き込んで来た。

「そ……そんなはず無いでしょ！」

彼の腕から無理やり離れて、脇に置いてあった病院指定の前開きパジャマを押し付けた。

「そんな元気あるんなら、自分で着れるでしょ！」

使い終わったオシボリを持って慌てて病室を飛び出した。

セクハラ高校生

暗い廊下を急ぎ足で歩いた。

キッ

キッ

キッ

猿の鳴き声じゃないけど

キスをしてしまった。

イヤ違う。してしまったんじゃない。

されたんだ。

うゝ

二十一年。守って来た純潔が……あんな暴走族の男に
どうすんの私。

あいつに責任取って貰うか？

責任？

そんなこと言ったら責任取るから俺の女になれと言われて

気が付いたら、風俗へ売られたりしたら大変だ。

ここは……泣き寝入るしかないか？

ちよつと、涙が出て来た。

まあ。相手が眼の覚めるようなイケメンだってことで、自分を慰め
よう。

好きな人じゃなかったけど。

イケメンだってことで……

グスッ。

グスッ。

フエーン。

誰もいない暗い廊下で泣いてしまった。

イカン。

こんなん泣いたらイカン。

世の中にはもつと辛いことがいっぱいあるんだ。
涙を手の甲で拭い、お腹に力を入れた。

それに私。

見栄を張ってしまった。

あんな相手に見栄張って……

ファーストキスだって

思い切り泣いてやればよかった。

イケメン高校生患者を困らせてあげれば良かった。

それにしてもあいつ、私を馬鹿にして楽しんでやがった。
くそ。

暴走族のくせに。

ナースをからかうんじゃない。

思い出すと逆に腹が立って来た。

そう、プリプリ怒りながらナースステーションに着くと初子先輩が

デスクに座ってため息を付いていた。

「初子先輩どうしたんですか？」

「え？うん。この整形外科病棟に運ばれて来た患者が一人で良かったわ。下の階の外科病棟が大騒ぎよ。二十人ほどの暴走族が一気に運ばれたらしいわ」

「二十人も？同じ喧嘩でしょうか？」

「どうでしょうね。私は暴走族なんか分からないわ」

「私も分かりません」

そんなことを話しているとナースコールが鳴った。

初子先輩がマイクに向かって返事をする。

『どうしました？』

『はい、はい。直ぐに伺います』

私の方を向いて

「神崎さん。405号室の急患さんが来て欲しいそうよ」

「……」

405号室？

くそ〜なによ。

また、私をからかいたいわけ？

私は拳をフルフルと握りしめて405号室へと向かった。
くそ〜あの高校生暴走族め。

なんか余裕のある顔が癪にさわる。

おまけにナースコールだなんて、俺様男か？

ブツブツ言いながら暗い廊下を歩く。

405号室のドアの前に立って、マイナス53度ほどの冷たい声を
出しながら

「はい。なんですか？」

ドアを少しだけ開けてそう聞いた。

「ちよつと〜。バージンのナースさん。このパジャマダサインです
けど」

バージンって言うな。恥ずかしいだろ？

「仕方ないじゃない。今夜はこれを着て我慢して。明日自宅からパ
ジャマを持って来て貰らって」

「え〜。じゃあ、明日、家に電話してよ」

「自分でかけなさい」

どこまで俺様男なんだ？

「それよかさ〜俺……息しにくいんだけど」

少し表情を歪めた。その整った気の強そうな顔を歪めている。

確かに、息がしにくそうだ。

「はあ……はあ……」

その表情がとても気になったので一応ベッドに近づいて見た。

「どうかした？」

「ナースさんが……自分で着ろって言ったからさ〜」

電動ベッドを立てた状態の彼の身体から取り付けられていたはずの
コルセットが外されベッド下に転がっている。

「ちよつと……もしかしてコルセット外した？」

「だってそうしないとズボンが脱げないし……パジャマ着れないだ

る」

「だからってどうしてコルセット外すのよ」

「だって邪魔だったし」

「ヤバイよ。これ、ヤバイ。」

慌てて枕元にあるナースコールのブザーを押した。

『はい？どうしました』

「初子先輩！患者の様子が変です」

『どんな状態？』

「息がしにくいみたいです。呼吸が乱れてます」

『分かった。直ぐにドクター呼ぶから。患者の名前分かる？』

「ハッ！」

しまった。

私、さつきキスされて動揺して患者の名簿を書き入れるの忘れてた。

「すみません。名前確認してから報告します」

『神崎さん。先に名簿作成しなきゃダメでしょ』

「すみません」

「怒られてやんの」

顔を歪めながら毒舌をたれて来る。

備え付けのテレビ台の上に置いていた名簿を挟んだ手板を手に取り

「ごめんなさい。あなたの名前と住所聞いて無かった。教えてくれ

る？」

「み……水野如月」

「水野如月君ね。住所は東京都〇〇区」

名簿に書き入れてから

「ベッド、倒すからね」

電動ベッドを平らに戻した。

「横になった方が楽かな」

如月がそう言いながら大きく息を吐いた。

ナースコールのボタンを押して、初子先輩に彼の名前を告げた。

直ぐにドクターに連絡を取ると言ってくれた。

「如月って変わった名前ね」

「うん。二月生まれだからキサラギだってさ。単純だろ？俺の親
瞳だけを動かしてこちらを見る。」

その上目遣いの瞳がまるで子犬のように見えた。

あんまり可愛かったので、そつと彼の髪に手を添え、額に掛つた
髪を撫でてやった。

「ナースさんの手、冷たくて気持ちいい。ねえナースさんって名前
なんて言うの？」

「私？神崎よ」

「下の名前は？」

「……」

あまり好きじゃない名前ってか、笑われる名前だから言いたくなか
った。

「言つてよ。これから名前で呼ぶからさ」

「陽良子」

「え？」

「陽良子」

「ヒヨコ？」

如月が大きく眼を見開いて私の名前に吹き出した。

「もう。だから言いたくなかったんだ」

「ううん。よく似合っているよ。ヒヨコかゝあゝ笑う」

ニコリと笑った。

切れ長で、挑発するような眼が急に綻ぶとなんと可愛い。

「如月君の名前も似合っているよ」

「やめてよ。如月君なんてさ。らしくねえから。キサツちでいいし」

「キサツち？」

「うん」

少し照れた顔もあどけなさがあつてとてもいい。

この子。きつと学校じゃあモデルんだろうな。

「あつそれともう1つ質問なんだけど……」

「えっ？」

掛け布団の隙間から左手が私の胸元に伸びて来て……

フニユ

「……」

「ここ……何カップ？」

「……」

フニユ、フニユ、フニユ。

「……」

「スゲーデカインだけど。さっきからずっとこのことばっか気にな
って仕方がなかったんだ」

フニユフニユフニユフニユ

「い……」

「俺、ここまでデカイのまだ相手したことないな。うんこの質量
はDは下らないなうん」

フニユフニユフニユフニユ

「……へ」

「へ……」

「へ……」

「ヘンターイ！」

如月の手を思い切り跳ねのけ

「ちよつと……あんた、今にしたのよ！」

ニヤケタ如月の首を思わず絞めに掛った。

「ごええええええ」

「謝って済む問題じゃない！」

「ごええええええ」

「がー腹立つ。さっきからなんなのよ。私のファーストキスも持っ
てちゃって……」

絶対、絶対許さないから！」

「グ……グルジ」

「このセクハラ高校生！」

ガラガラガラ

「ちょっと神崎さん。患者さんに何しているの！」

如月の首を絞めた状態の私を見て、初子先輩の怒鳴り声が病室内に響き渡った。

「……………」

わ…………私もう…………泣きたい。

野獣鮫脳男

「患者の具合どうですか？」

そう言いながら入口から入って来たのは救急処置室に今夜待機している当直医の少し猫背気味の佐野先生だった。

「……」

「……」

私と初子先生が佐野先生を見たまま固まってしまった。

だって、佐野先生。

右手にはロープ。左手にはどっから調達したのか手錠を持ってる。

「せ……先生それは？」

初子先生が恐る恐る聞く。

「この患者……下の処置室で暴れまくったんだ。かなりの興奮状態で完全にどっかに行っちゃまっていたから、もう、下は大騒ぎだったんだ」

佐野先生もかなりの興奮状態だった。

肩で息をしている。なんか……戦闘態勢に入っているって感じ。

私と初子先生が無言で如月に眼をやる。

「嘘？そうなの？俺、暴れた記憶、全然ないんだけど」

しらゝとした顔で如月が眠そうに欠伸をする。

「安定剤を打って、やっと大人しなっと思ったたら、もう、眼が覚めたのか？」

佐野先生。如月にかなり手古摺ったみたいで、先生の眼もどっかに行っちゃっているんですけど……

「まったく。騒ぐ騒ぐ。二回も点滴を引きちぎりやがった」

肩でゼイゼイ息をしている佐野先生が、よほど如月が怖かったのか、手にしていたロープをすでに大人しくなっている如月にベッドごと巻きつけ始めた。

「ちょ……せんせ。何するんすか。俺、今は落ち着いているんですけど」

「その落ち着いた状態で、下の二十人を一人で病院送りにしたんだろ？下のヤツらがビビりながら、泣き付いて来たぞ」

眼が完全に行っちまっている佐野先生が、最後に如月の手に手錠を掛けてベッドに引っかけた。

「先生……何もそこまでしなくても」

佐野先生がポケットから新しい注射器を取り出した。

「この患者……注射が死ぬより怖いって、車いすを放り投げて来たんだ。危うく僕が死ぬ所だった」

「うわくそ。注射打つのかよ！」

「精神安定剤だ。安定させて検査に入らないと、病院自体が壊滅に向かう」

き……如月。

なんてヤツなんだ？

二十人を病院送りって……

だから、あんな硬い筋肉が付いているんだ。

あんな綺麗な顔して……って、誰も顔に傷を付けられなかったってことだろな。

そして、怪我しているあの右手はもしや、二十人を素手で殴ったからじゃないのか？

想像したくない現実。

なんてハチャメチャな男。

まるで、動物園にいる、暴れて手に負えないライオンか虎じゃないか。

そんな男に私、ファーストキスを持ってかれて、胸まで揉まれて

……

フニユフニユフニユって……

最悪じゃなか！！

ガチャガチャガチャ

繋がれた手錠が物凄い勢いで音を立て始めた。

如月が上半身をよじり、肋骨が折れているはずなのに、腹筋を使って括りつけられたベッドごと飛び上がろうとしている。

まるで呪われたエクソシストのようだ。

「何を突っ立っているんだ。早く患者を押さえこんでくれ！」

佐野先生がそう叫んだので初子先輩が如月の足を、私は上半身を飛びつくように押さえこんだ。

「うわゝ。やめろゝ！注射打つくらいなら死んだ方がマシだ！」

如月の腕を掴みにかかっている佐野先生が腕と一緒に振り回されている。

「少しの辛抱だ。大人しくしなさい！」

凄い力……

なんてヤツなんだ？如月って男は。

これじゃあ、野獣じゃないか？

フエーン！

初めての夜間勤務で最悪の患者に遭遇しちゃったじゃないかゝ。

その上セクハラは受けるし最悪中の最悪だゝ。

私も如月に振り回されまいと身体を如月に押し付けて、全体重を掛けた。

すると……

如月が急に大人しくなった。

「お……観念したか？」

佐野先生がニヤリと笑いながら上半身裸のままの如月の腕に、注射針を差しこんだ。

「ふげゝ。ぼのぶねのばんばぐばんねゝ」

（すげゝ。このムネのかんかくたまんねゝ）

私の胸元で如月の声がした。

慌てて声のする方を見ると如月が身体ごと押さえこんだ私の胸に顔を埋めて昇天しかけている。

「ぎゃゝ！」

声を上げて如月から身体を離れた。

「俺、スゲゝ癒された」

そう言いながら、その整った顔に笑みを浮かべながら眠りに就きはじめた。

「……」

「……」

「……」

ポンツ。

如月に振り回され、髪がボサボサ状態の佐野先生に肩を叩かれた。
「君、今日から、この患者の担当に決まりね。これからよろしく頼むよ。野獣にも思わぬ弱点があったもんだ。ハアゝ疲れた」

野獣の担当

真っ暗な廊下で常備灯だけが光る中ペタリと両膝を床に着き、両手を着いて、ガクリと首を垂れた。

な……なんのバチで

この野獣の担当だなんて……

何が弱点よ。

唯のスケベじゃないか。

先が思いやられる。

私……

頭も回転悪いし、背だつて低いのに、どうして、胸だけ無節操に成長しちゃったんだろ？

今まで女ばかりの学校だったからあまり気にしなかったけど

看護師になつてから、やたらと男性患者の視線を感じる。

男もドクターからの視線も感じる。

感じるのはこの大きな胸にだけけど。

うゝ私……泣きそう。

「神崎さん。そう、落ち込まないで。私たちも出来る限りあなたに協力するから。一緒にあの野獣と戦いましょう」

初子先輩の何の慰めにもなっていない温かいお言葉。

仕方なく「はい」と頷いた。

大人しく眠った如月の検査結果は、折れた肋骨の一部が肺に突き刺さる手前だったようで、

それが原因で呼吸困難に陥ったようだった。

「暫くはコルセットを外さないように見張って下さい」

屍化した佐野先生がそう言ってフラフラと救急処置室へと帰って

行った。

ナースステーションに戻り、初子先輩と二人大きくため息を付いた。

さっきの騒ぎで二人して、ヘナヘナと椅子に座り込んだ。

「いつまで入院しているんでしょうか？あの野獣」

「さあ。あの分じゃあ当分かかりそうよ。暴れた分だけ入院が伸びるわね。はあ先が思いやられるわ」

そんな会話をして、二人同時にまた、大きなため息を付いた。

点滴にも安定剤を投入している為、その後野獣こと如月は朝まで眼を覚ますことはなかった。このまま永遠に眠り続けてくれと神にお祈りをした。

患者に対してなんて不届き行為。

叱られそうだが、私の身にもなつてよ。

野獣相手に天使の顔なんてできるもんか。

病室の見回りの時間。

初子先輩の指示で、トボトボ暗い廊下を歩いた。

点滴の点検の為、野獣如月の病室を訪れた。

懐中電灯を照らして顔を伺う。

スヤスヤと眠る如月。

長い睫毛を伏せたその顔はやはりカッコイイ。

黙って大人しくしていたら、普通の高校生なのに、どうして暴走族なんかに入っているんだろう？

下の階の可哀相な二十人組みは敵のグループなのか？

如月には味方が一人もないのだろうか？

一人だけの暴走族なんて聞いたことない。

もしかして、使い走りか？

うん。あのふてぶてしい顔はどう見ても使い走りには見えない。なんて言うんだろ？

なんか……

どう言えばいいんだろうか？

背中にオーラが見えると言うか、威厳のような物を感じる。

野獣の王って感じた。

特攻服靡かせて、鉢巻き絞めて、どんな顔して暴れたんだろう？

まあ。暴走族なんて分かんないからどうでもいいことだけど。

でもなあ。こんな強烈な相手。

私の人生この先忘れることは無いだらなあ。

もし、私が誰かと結婚して子供が出来た時

「お母さんのファーストキスの相手は誰？」

な〜んて聞かれたら

「ファーストキスの相手は暴走族の野獣だったのよ」

って答えるしかないじゃないの。

子供に笑われそうなエピソードだ。

飛んだ夜間勤務だった。

如月の病室内に、薄暗い朝の日差しが差し込んで来た。

ベッドで眠る如月のその横顔に反射する。

ため息が出るほどの綺麗な顔。

しまった……

また、見惚れてしまった。

フルフルフルと頭を振った。

ダメだ。

野獣相手に甘い顔は禁物だ。

さっきみたいに「俺のこと意識している」って、また、からかわれそうだ。

私は慌てて如月の病室を後にした。

暴走族の総長？

早番勤務の先輩たちがゾロゾロと出勤してきた。

「神崎ちゃん。御苦労さま。家に帰ってゆっくりしてね」

優しい麻由美先輩がニッコリ笑ってくれた。

「はい。それでは、失礼します」

ペコリと頭を下げて、職員専用の更衣室に向かった。

やっと家に帰れる。

一人暮らしの安アパートだけど。

安くて狭いアパートだけど。

私にとっては天国なのだ。

硬くて寝心地が良くないパイプベッドに、おもい切りダイブしよう。

もう、クタクタだ。

布団の温もりが恋しい。

そのまま爆睡してやる。

誰にも邪魔されずに一日中寝てやる。

ナース服を脱いで、私服に着替えを済ませ、帰途に着いた。

まだ、誰もまだ来ていない外来用玄関の受付ロビーを抜けて、裏玄

関へと向かった。

外に出ると、朝日がサンサンと照って気持ちいい朝だった。

って……思ったのもつかの間。

「……」

「な……何？」

裏玄関から見える駐車場にはおびただしい数のバイクがズラリと並んでいる。

朝日を受けた多量のバイクがピカピカ光っている。ま……眩しい。

「な……何？」

如月と同じような特攻服を着た派手派手連中が五十人ほど一斉に私の方を向いた。

私は思わず後ずさりをしてしまった。

か……帰れない。

摺り足で、後向きで引きさがる。

「ちよつとあんた」

その中にいた赤色で長髪の男が声を掛けて来た。

ドスの利いた低い声にビクリとして逃げる事ができない。

赤髪男が白い特攻服を靡かせてズカズカと私に近づいて来た。

一重の切れ長の眼。

最初に見た如月の瞳のように鋭い光りを放っている。

如月が金色のライオンなら赤色の狼って感じ。

赤色の狼？

ぷはっ。

赤ずきん被った狼ってかなり可笑しいんだけど。

なんて、変な想像してしまつて、顔がこの状況でニヤケて来た。

バカ。私のバカ。こんな緊張した場面で妄想なんて……

赤い髪をしたイケメン狼が私の前に立ちばかった。

「な……何？」

凄い威圧感。

ニヤケた私を見据えた顔はやはり狼のよう。

その上、とてつもなく機嫌が悪そうだ。

これは……

如月の仲間か敵か？

着ている白い半被には如月と同じ菊の御紋。

同じってことは仲間？

「な……何ですか？も……もしかして……如月君の仲間？」

「あんた……水野如月知っているのか？」

低いけどよく通る声でそう聞いて来た。

「は……一応ここの看護師なので」

「そうか……それで如月さんは大丈夫なのか？」

赤髪の狼が慌てた様子で聞いて来た。

「うん。暴れて酷かったけど、今は……点滴受けて眠っている」
そう聞くと赤髪狼が駐車場に向かって大声を上げた。

「おい。お前ら。この病院に間違いない！如月総長はこの病院にいるぞ！我らの総長は無事だぞ！」

そう叫ぶと、駐車場にいた何十人もの暴走族員が大きな歓声を上げた。

「ウオッ！」

「如月総長バンザイ！」

パッパッ！パッパッ！

そ……総長つて？

如月総長？

あの野獣総長だったの？

パッパッ！パラリンパラリン

バイクのクラクションが鳴り響く。

ここ、病院よ。

やめて。

心の中でそう叫んでいると

ガシャーン

私の頭上で何かが割れる音がした。

「？」

眼の前にいた赤髪狼がフワリと私の身体を包み込んで来た。

「え？」

私を庇う様にその胸に閉じ込め

「ヤバイ！危なええ！」

赤髪狼の肩越しに見えたのは黒くて長方形の箱のような物。

ガラスの破片と一緒に頭上高くからクルクル回転しながら落ちて来た。

「えっ？何あれ？」

そう思うと同時に眼の前で

ガアウシャーン!!

まるで爆弾が投下されたような音がした。

ガラスやプラスチックの破片がバラバラになって飛び散った。

赤髪狼が背中に飛んで来たガラスの破片をパラパラと受けた。

赤髪狼が庇ってくれなかったら、私……下敷きになってた？

爆弾のような音にバイクのクラクションと歓声がピタリとやんだ。

落ちて来たのは……

各病室に設置して有るはずの有料テレビ兼冷蔵庫だった。

無残にも粉々になっている。

恐る恐る頭上を見上げた。

「じゃかましーい!!眠れねえじゃねえか!!」

四階の窓から顔を出したのは……紛れも無く野獣如月だった。

私の足元には交通事故で大破したグチャグチャの車のような有料テ

レビ兼冷蔵庫がサンサンと輝く太陽の日差しを浴びていた。

お詫び

連載途中ですが、

現在、魔法のiらんどで

「総長が愛した白衣の天使」Eカップの悲劇」が、
今日発表された

「第5回iらんど大賞 受賞候補作品 最新版!!」
に追加作品で選ばれました。

なんか、オマケ的な感じなんです。

大賞や書籍化など大層なことは望みませんが候補に選ばれたことで
満足してます。

これにより、当分の間、連載を中止させて頂きます。

お気に入りなどに登録されていた方々、申し訳ございませんでした。
折をみて、再開させて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9748y/>

総長が愛した白衣に天使 Eカップの悲劇～

2011年12月21日20時54分発行